

抑制トマトの高温対策及びアザミウマ類防除対策の取組

～新技術導入による農家所得の向上を目指す～

1 活動のねらいと背景

八街市の抑制トマトの収量・品質の向上を目指して高温対策、病害虫防除対策に取り組みました。

当地域の抑制トマトは、パイプハウスで栽培する半促成スイカの後作として栽培され、農家経営を支える上で重要な品目となっています。平均収量は、4t/10aを上回りますが、部会内において技術レベルの差があり、技術の平準化が求められています。さらに、近年は、夏季の高温による着果不良やアザミウマ類を始めとした病害虫の発生による品質低下が問題となっています。

そこで、JA千葉みらいグリーンやちまた園芸部トマト部会（139名）を対象に防除対策の検討を行いました。

2 普及活動の経過

（1）トマト部会への病害虫対策指導

栽培講習会では、アザミウマ類の初期防除の対策として薬剤のローテーション散布を生産者に指導しました。さらに、JA千葉みらいと連携して高温期の栽培管理について現地検討会を開催し、病害虫が多発していた生産者に対して個別巡回を実施しました。また、栽培期間中に土壌病害虫の発生が確認された生産者に対しては、先進的な技術として高密度ポリエチレン不織布のマルチ利用に関する情報提供や、今後の病害虫対策についてマニュアルを作成し、簡易的な病害虫診断方法などが行える体制を築きました。

（2）新技術導入に向けた試験の実施

昨年度に引き続き、高温期の地温上昇抑制とアザミウマ類の行動を抑制する効果が期待される高密度ポリエチレン不織布について調査しました。また、コスト削減を含めた高密度ポリエチレン不織布の検討を行いました。栽培期間中の品質と収量については、高密度ポリエチレン不織布区、妻面解放区、慣行区に分けて調査を実施しました。

3 活動による変化・動き

（1）病害虫防除に対する指導強化による効果

生産者に対してアザミウマ類の初期防除を栽培講習会で指導した結果、生産者の多くが定植後から重点的に農薬のローテーション散布を実施しました。生産者からは、達観でアザミウマ類による被害が例年に比べて少ない傾向であるという意見が聞かれました。

（2）試験実施結果と普及に向けた動き

コスト削減を目的に、高密度ポリエチレン不織布をベッド全面に設置した区とマルチとして条間50cmに設置した区で比較を行い、マルチとして設置した区は全面に設置した区の地温と比べ1℃高い状況でしたが、慣行区と比べると2℃地温が下がる結果が得られました。

また、高密度ポリエチレン不織布をハウス周辺に設置することでアザミウマ類の侵入を

抑制する効果がありました。しかし、ハウス内部の密度低減には効果が認められませんでした。

収量及び品質は、妻面解放区で収量が最も多く、高密度ポリエチレン不織布区でA品率が最も高い結果が得られました。この試験結果を、トマト反省会において生産者に報告しました。その中で、一部の生産者から高密度ポリエチレン不織布を検討したいとの意見が出されました。なお、平成29年度の高密度ポリエチレン不織布を利用した生産者は5戸となりました。



高密度ポリエチレン不織布である
デュポンタイベック 700AG



妻面開放後のパイプハウ

4 今後の課題と活動

当産地では、ネコブセンチュウ類を始めとした土壌病害中の被害が増えていることから各経営体の被害状況を認識するため、トマト部会に対してアンケート調査を実施する予定です。また、新技術である高密度ポリエチレン不織布を導入意向がある生産者を明らかにし、導入を支援することで、収量・品質の向上を進めます。

さらに、アンケート結果から、各経営体の課題を抽出し、抑制トマトの安定生産に向けた活動を進めていきます。

5 担当グループ名 八街・富里グループ